令和８年度宇治市総合教育会議 議事要旨

日 時　令和８年８月２８日（金） 午後６時～７時３０分
場 所　市役所７階 特別会議室

≪ 次 第 ≫
【１】 開会 （18:00）
【２】 市長あいさつ
【３】 「宇治市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について」
・事務局説明
・意見交換
【４】 「人生１００年時代における学びの継続について」
・事務局説明
・意見交換
【５】 閉会 （19:30）

≪ 出 席 者 ≫
宇 治 市 長　松 村 淳 子

宇治市教育委員会
教 育 長　木 上 晴 之
（教育委員）
教育長職務代理者　加賀爪 毅
委 員　中 筋 斉 子
委 員　小 山 栄 子
委 員　左 聡一郎

宇治市教育委員会事務局

部長	秋元 尚	副部長	川崎吉隆
教育総合推進センター長	武田義博	教育総務課長	渡邉聖介
生涯学習課長	福山誠一	教育総務課副課長	亀井明美
生涯学習課副課長	綿引健文	教育総務課総括指導主事	清水智博
教育総務課主任	小谷野里紗	教育総務課主事	久保孝太

宇治市健康長寿部

部長	星川 修	長寿生きがい課長	川瀬理恵子

１　開会

２　市長あいさつ

３　「宇治市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について」

【事務局・教育総務課説明】

１．　計画の趣旨、現状

本計画は、「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」いわゆる「給特法」が令和７年６月に改正され、その中で新たに設けられた第８条第１項に規定される計画として、服務監督を担当する各市町教育委員会が、それぞれの状況を踏まえて策定するよう義務付けられたものである。

計画の中では、達成しようとする目標及び実施する業務量管理・健康確保措置の内容を記載することが求められている。

２．　目標

（１）時間外在校等時間に関する目標

・１か月時間外在校等時間が４５時間以下の割合を１００％にする。

・１年間における１か月時間外在校等時間の平均時間を３０時間程度にする。

（２）ワーク・ライフ・バランスや働きがい等に関する目標

・年間の年次有給休暇の平均取得日数を１５日以上にする。

・ストレスチェックにおける高ストレス者割合を１０％まで減少させる。

３．　計画期間

令和８年度から令和１１年度までの４年間とする。

４．　実施する業務量管理・健康確保措置の内容

（１）業務の見直し、及び職場環境の改善に関する取組において１４項目、（２）教育職員の健康及び福祉の確保に関する取組において４項目を重点的に取り組む事項として示している。

５．　関連する取組、今後のフォローアップについて

改正給特法において、本計画を策定した際にはホームページへの掲載等によって公表し、総合教育会議に報告することが義務付けられている。また、毎年度本計画の実施状況や達成状況についても同様に公表・報告することとされている。

宇治市においても、教育職員の時間外在校等時間の状況を把握し、市ホームページへの掲載や教育委員会会議への報告等を予定しており、これによって取組の着実な実行を図り、本計画の内容に照らして課題が見られるときは、当該校に対する個別の支援・指導を実施する等、着実なフォローアップにつなげていく。

【協　議】

＜委　員＞　時間に関する問題は、教育現場だけでなく一般の会社でも発生している。数字だけを見て改善しようとしても、個人のモチベーションが続かないこともある。自分の会社でも様々な策を検討してきたが、結論は人手を増やすことだった。具体的には、スタッフ５名で足りるところを８～９名配置し、各々の負担を減らして、その範囲内で集中的にやってもらうことにしている。

時間を減らすと言うとネガティブに感じてしまう。そうではなく、「あなたの役目はこれです。これ以上は別の人がやります。」という指針が書かれていたのかなと思う。人件費等経費がかかり高いハードルではあるけれども、取り組んでいかなければならないことだと感じた。

＜委　員＞　目標の「ストレスチェックにおける高ストレス者割合を１０％まで減少させる。」について、ストレスの内容が十分周知できているのかどうか懸念される。ストレスは、個人の状況によることが多く、個別対応が必要なもの。「増やさない」ではなく「下げる」としているので、どういう対策を想定してストレス者割合を減らすとしているのか、事務局等で検討しているストレスケア方針があれば教えていただきたい。

＜事務局＞　「４．　実施する業務量管理・健康確保措置の内容」で紹介した、「業務の見直し、及び職場環境の改善に関する取組」の１４項目がある。学校によって取り組みやすいもの、取り組みにくいものがあるかとは思うが、何か一つでも先生方の負担を減らすことにつながればいいと思っている。

ストレスチェックについては、２９の質問項目を分析してストレス割合を出している。単純に業務が多いだけでなく、それに対して職場でのフォローがあるのかどうかもあわせて判定している。単に業務を減らすだけではなく、職場としてどういったフォローができるのかという検討も、学校管理職を交えて行っていきたい。

＜市　長＞　教職員の負担を減らすことは説明のとおり。ただ、ストレスを減らすことと教職員の負担を減らすことは、必ずしもイコールではない場合もある。

＜委　員＞　教職員の方が退職されると、皆さん元気になる。高血圧の方は血圧が下がり、運動を継続される方も多く、日々どんどん健康になられる方がたくさんいらっしゃる。業務だけではなく、プラスアルファの部分のフォローが入ると仕事の中でのストレス度が減るのかなと感じる。

また、個人の能力に合った仕事量が割り振られているのかどうかの点から、個人の能力を見極める管理職が必要だとも感じる。先ほど個別対応と話したが、同じことをさせてもストレスの感じ方は人によって本当に様々で、ある人にはすごくしんどいものでも、ある人にはそうではない場合があり、業務量だけではかれない部分がある。それだけに管理職のマネジメント能力が必要。

学校の場合は、業務内容が多岐にわたるので、この人はここまでは大丈夫だが、ここから先はサポートが必要、というような判断をしつつ、ケアも必要な職場。その中で、高ストレス者割合を１０％まで減らすのであれば、業務だけでなく、個別フォローの体制構築もしっかりしていただけたらと思う。

＜市　長＞　業務負担を減らす１４項目に加えて、学校管理職含めた内部での風通しの良さについても、きめ細かに進めていけたらよい。

＜委　員＞　勤務時間に関する目標などを計画に定められたということで、勤務時間の長さは、決して軽く見てはいけない課題だと思う。その一方で、皆さんのご意見にもあったように、勤務時間ばかりが取り沙汰されるのも方向性としては違う。重要なのは、教職員の方々が心に十分な余裕を持っていただいているかどうか。心に十分余裕を持った状態で子どもたちと向き合っていただきたいし、そのための計画であってほしい。

働きやすさという点では、子どもに関しては多様性がよく言われるようになったけれども、教職員の先生方についてもいろんな方がいていいのかなと思う。教職員の多様性にも目を向けていただいて、少しでも伸び伸びと働きやすい職場であってほしい。

＜委　員＞　働き方改革というと、時間外勤務を減らすことに目が向くが、減らした時間を子どもたちと向き合う時間にしていくことが非常に大事。子どもたちと向き合う時間は、先生方にとってはストレスとはならないのではないか。そういう時間をとりやすい環境を作ることも併せて考えていくことが大切で、それが教育の質を高めることにもつながるのではないか。

学校は様々な業務があり、子どもたちに教育を施すだけではなく、事務作業もある。給食費の徴収や学校開放業務など、教頭先生を筆頭に事務量が本当に多い。市も整理はしてきているものの、本当に必要な業務なのか、その時間を子どもたちに向き合う時間にできないか、教育委員会として見直しをしてもらうことも大事。

＜教育長＞　貴重なご意見をいただきありがとうございます。業務量管理・健康確保措置実施計画の作成ということで、計画の作成となるとどうしても数字を追いかけてしまう面はあるものの、大切なのは、子どもたちが生き生きと楽しく学校生活を送れること。そのためには、教職員が元気に生き生きと子どもたちに向き合うことが最も大切だと思う。先生方のやりがい・働きがい・働きやすさ、それらを全て包括して宇治市の教育を進めていきたい。

＜市　長＞　学校という学びの場で、子どもたちには生き生きと興味を持って楽しく学んでほしい。

数値目標については、時間外の考え方などは市長部局と合わせている部分がある。同じ宇治市で働く点で同じ目標を設定している。

４　「人生１００年時代における学びの継続について」

【事務局・生涯学習課説明】

１．　高齢者の生涯学習の推進

教育基本法に基づき政府が策定している「教育振興基本計画」において、教育施策の目標・基本施策として、「高齢者の生涯学習の推進」が掲げられている。その中で、『高齢者を含めた全ての人々が、地域において、世代を超えて互いに交流しながら、地域や暮らし、各々の生きがいを共に創り、高め合う「地域共生社会」を実現するため、様々な取組を通じて、誰もが生涯を通じて学び、地域に参画し、豊かな知識・技術・経験を生かせる環境を整備する。』と定められている。

２．　一般的な生涯学習環境の状況

現在の高齢者の学びの場

・大学等で実施されている公開講座
・放送大学のオンライン授業
・民間事業者等で実施されている通信教育や各種講座
・各自治体等の事業

３．　宇治市における主な取組状況

（１）鳳凰大学

第二、第三の人生を歩んでいる方が、これからの生活に必要となる知識や、心豊かな日常を過ごすための教養を身に付け、健康で生きがいのある生活を送るための学習の場として開設した。昭和５２年に開設し、令和８年度で４９回目となり、これまでに３，６２６名が卒業した。

主催は宇治市生涯学習センターで、宇治市在住の６５歳以上の市民を対象としており、今年度は２６０名が在学。受講期間は４年間、１年ごとに「文化歴史」「健康管理」「政治経済」「社会福祉」の４コースを学習していただく。また、「抒情歌・陶芸・かな書道」のクラブ活動があり、それぞれ活発に活動され、活動の成果などを大学祭で披露されている。

（２）高齢者教室

豊かな知識や教養を身につけ、健康で生き生きとした生活を送ることを目指して、先程の鳳凰大学と同様に昭和５０年代から実施している。

宇治市在住の６５才以上の市民を対象とし、各公民館で実施し、今年度も各公民館１００人前後の皆さんに受講していただいている。受講期間は１年間だが、再受講が可能であることから、毎年楽しみにしている方が多く、リピート率が７０～８０％と非常に高い。

受講者の年齢層は高く、平均年齢は約８０歳である。講座は開講・閉講行事を含め年間８講座だが、そのほかに特別企画やお楽しみ会などがある。なお、講座はすべての公民館同じ内容であり、その内容は、各公民館にいる指導員が全員集まる指導員会議で決定している。

（3）高齢者アカデミー

宇治市と京都文教大学・短期大学が連携し、地域社会に貢献する人材を養成するため、平成２５年９月から開講しており、生涯学習の一環として高齢者へ学習機会を提供することにより、高齢者の社会参加、生きがいづくりの促進、多世代交流の機会創出を図ることを目的としている。

宇治市在住の６５歳以上の市民を対象に、現役の大学生と一緒に学んでいただいている。受講期間は２年間で、秋と春の２学期制である。費用は宇治市からの助成と京都文教学園の一部免除があり、受講者が負担する費用は各学期１５，０００円。受講内容は、各学期につき、１科目の履修と月１回のゼミ活動があり、大学生活はアカデミーサポートスタッフがサポートしてくれる。指定された中から科目を選択でき、２年間で４科目を履修する。

（4）市民大学

１９９５年に生涯学習センター事業として開講したが、その後、２００６年からは「市民の手による、市民と地域のための大学」を合言葉に、市民ボランティアによる自主運営事業として取り組んでいただいている。

この事業は誰でも参加可能であり、高齢者に限っているわけではないが、実際の参加者は大多数が高齢者である。講座内容は、５回連続講座の「歴史文学塾」が年間２回開催されるのと、単発講座の「歴史コース」「宇治学コース」があり、あわせて年間約３０回の講座を開催しており、市は共催事業として広報活動などを行っている。

（5）セカンドライフ講座

退職後あるいは退職を控えセカンドライフの過ごし方を考えている人、新しく生涯学習やボランティア活動を始めたいと考えている人などを対象として、これまでの知識や経験を活かし、これからの過ごし方について考えるきっかけとなるよう開催している。

この事業は福祉サービス公社・ボランティア活動センター・生涯学習センターの共催事業として、宇治市民を対象に年２回開催しており、講義と事例発表や交流を通して今後のセカンドライフについて考えるきっかけとしていただいている。

（6）各種教養講座

生涯学習センターや図書館、源氏物語ミュージアムで様々な講座が行われているが、その一例として、源氏物語ミュージアムの講座をあげる。

源氏物語を楽しむための基礎知識や、知っていると役立つ内容を中心に開催している入門講座と、源氏物語と平安時代の文化などについて１０回連続で開催される連続講座がある。それぞれ参加費は必要だが、多くの方が源氏物語について学んでいる。

４．　学んだことを生かした事例

例１

鳳凰大学で学んだ方が、更に学びを深めるため高齢者アカデミーを受講され、卒業後は、ちょっとした身の回りの生活支援や、高齢者の居場所等の活動の担い手として日々活動されている「健康長寿サポーター」などのボランティア活動をされたり、自ら創作した「宇治に関するクイズ」で宇治の魅力発信をされたことで紫式部市民文化賞を受賞されるなど、活躍されている。この方には、先に紹介した「セカンドライフ講座」において退職後の取り組みを発表していただいた。

例２

市民大学は現在ボランティアだけで運営されている。ただし、スタッフの高齢化も進む中においては、運営の負担が増し、新たなスタッフの確保が困難な時期があったと聞いている。そこで市民大学の受講者に声をかけ、自らが学ぶだけでなく学びを提供する側へ引き込めるよう工夫をされた。ボランティアだけで運営してから２０年間、スタッフも変わっていく中で、今ではほとんどの方が元受講者で運営をしていただいている。

例３

高齢者アカデミーの卒業後の活動では、ＯＢ・ＯＧ組織を立ち上げ、月１回時事問題をテーマに意見交換をされたり、また、例１で紹介した健康長寿サポーターや、認知症の人や家族をサポートする「れもねいだー」などのボランティア活動をされている方、高齢者の居場所・就労場所としてカフェを運営される方など、各所でご活躍いただいている。

これらの事例以外にも、多くの方が学んだことやこれまでの経験を生かして、ボランティアや学びを提供する側としてご活躍されており、様々な場面で社会参画・社会貢献をされている。

５.今後の取組について

・学びの継続について・・・学び、学び直しのきっかけづくり
・学びの循環について・・・学びを通じた生きがい、つながりづくり
今後どのような取組が必要か、ご意見等を頂戴できればと考えている。

【協　議】

＜市　長＞　　生涯学習分野として生涯学習課が担当している部分と、健康長寿に関する分野として長寿生きがい課が担当している部分の２つがある。まとめてみると座学

的なものが多いが、実際には活動の場を提供したり、人と人が一緒にいろんなことをやることで文化芸術活動につながったり、新たな学びの場になっている。

鳳凰大学は、４年間の大学生活を楽しみ、卒業後もクラブ活動が続くという話を聞く。高齢者アカデミーは、若い方と一緒に活動される。卒業論文の提出ではないが、卒業前に２年間の取組の成果発表をされる機会があり、いくつになられても、皆さん資料はパワーポイントで作成される。これは今の大学のやり方に沿ったものだが、それができるように大学でサポートしていただく。そして孫のような年齢の若者と一緒にイベント等も参加される。市民大学では、先日、活動が２０年を迎えたということで、２０年の活動内容をまとめたものを持ってきてくださった。それを読んでいると、活動内容は多岐にわたり、宇治市民だけでなく、好きな方は奈良県や大阪府からも参加されている。

＜委　員＞　本当に充実していると感じた。興味のあることも何でもどんどん学んでいただいて、日常的なことでもボランティアでも学ぶ機会は生活のどこにでもあると思うので、こういう充実した場を使って世界を広げていただいたらよい。

「人生１００年時代の学び」は、高齢者世代・現役世代・子ども世代では意味が変わるのかなと考えていた。大人にとって学ぶ意味とは、目に見える形かそうでないかに関わらず、どう生きて何を残すかということだと思う。

一方で、子ども世代にとって人生１００年を見据えたときに、これは私の願いでもあるが、できれば実用的なことよりも、基礎・本質的なことをしっかり学んでほしいと思う。すぐに役立つ知識は必要であるが、子どもたちには、１００年、１０００年残るような物事の本質をしっかり学校で学んでほしい。タブレットやスマホのような媒体は、おそらく１００年後には残っていない。でも、紙に書いたものは１０００年以上残るものもあるし、１００年後もおそらく無くならない。教育格差とよく言われるが、本質的なことは、案外シンプルでお金がかからないもの。教育格差の解消という視点からも、そういう本質的なことを大事に進めていっていただけたらと思う。

＜市　長＞　地域で展開しているのが、６５歳以上の勤め終わられた方々を対象としたものが多くなってしまっている。実際に土曜日・日曜日開催が少ない点もあり、例えば源氏物語ミュージアム開催のものはほとんど平日のみ。そういった点から退職された方が対象のように見えてしまうが、そうではなく、時間帯の検討を含めて学べる環境の情報発信はしていかないといけない。学びたい人が学びの機会を選択できるようなものをつくっていけたらと思う。

＜教育長＞　小・中学校での教育は、昨今ではすぐにタブレットを使って表現をどうするかと考えたりするが、委員のお話のとおり、基礎・基本が大事。それは教職員にとっても同じく、新しいことをどんどん取り入れることも大切ではあるが、いつの時代でも変わらない大事なことも教えていきたいと考える。

＜委　員＞　鳳凰大学では、母がお世話になっているので、話を聞いてみた。クラブは楽しいが、回数が物足りないという感想だった。大学の講義で座学が多く、もう少しひと味違う個性的なジャンルのものがあれば、さらに興味を持てるとも言っていた。

自分自身は、城陽市の市民大学で講師側として参加したことがある。ご年配の皆さんに向けて普段の食について話をしたり、出汁のテイスティングをしたりした。皆さん楽しく話を聞いてくださった。

普段は料理屋を仕事としているが、料理をするだけでなく、食の根本には何があるのかと常に考えている。和食離れが進み、業界や食文化自体がこれから衰退していくことが目に見えているなかで、商売の枠を飛び越えて、料理人として自分は何ができるのかというところで、地域貢献できる部分を日々探している。取り組んでいる食育の活動もそのひとつ。

先ほどの本質について。うちの会社は新卒採用しかしないので、調理師学校を出たばかりの若い人が入ってくる。和・洋・中のいろんな料理がある中で和食を選び、京都を選び、そしてうちの会社を選んできた。そういう子たちは、調理技術というよりも、料理を学ぶ意識がとても強い。なぜ料理をするのか、何のためにするのか、どういう食材を使うのか、そういう意識が強く、そこが本質だと思う。

先の議題の、働く時間の問題にも本質があると思っている。

教育委員として、これまでに何度か学校訪問に参加したが、どこの学校へ行っても感じることは、先生方は、子どもたちに教えたい・成長してほしいという気持ちを持っているのかということ。先生方から、生き生きとした様子や楽しい様子を感じないことがある。自分は食育が好きだから、色々なことを考えて自ら動きたい気持ちがある。ただ先生方には、子どもたちが好き、子どもたちの成長を見るのが好き、教えたことに子どもたちが「なるほど」と反応するのが好き、そういう熱意や気持ちが足りないのではと感じることがある。若手の先生方は緊張されているのかもしれないが。

ストレスの問題には、働きたいけど働けないストレスの一面もあるのではないか。８時間よりもっとたくさん働きたいのに働けない。料理の世界でいくと、料理の技術をもっと学びたいのに学べないまま年数が経ち、キャリアばかりで技術は身につかないことにつながる。

心の部分が本質かなと思う。

＜市　長＞　子どもたちが知る機会を教職員は提供する。その教職員には本質を持ちながら仕事をしてほしいと。

＜委　員＞　子どもたちは本質の意味が分からないかもしれないが、先生たちから感じ取ることには一番敏感だろう。嫌々やっている感じがあれば話を聞いてくれないし、反対に好きで楽しそうならよく話を聞くのではないか。

＜ｾﾝﾀｰ長＞　子どもたちへの授業改善に熱意を持って取り組んでいる教職員ももちろんいる。ゲストティーチャーと、授業計画の中で子どもたちに向き合う教職員との違いが、委員の感じられたことの背景にあるのかもしれない。学びの作り方をしっかりとやっていく必要があると思う。

＜市　長＞　先生方の学びの計画をどうするというよりも、「教える」という本質を持って先生方には仕事をしてほしい、という意見だったのではないか。

＜委　員＞　通年で教える教職員の場合とゲストの場合では考え方が違うのは、そうだと思う。

＜委　員＞　自分ならどの事業に参加したいかと考えると、高齢者アカデミーで学生と一緒に学ぶことは魅力的だし、市民大学もいろいろなテーマがあって参加しやすそうだと感じた。ただ、参加するには自身が健康であることが前提にあって、そこから次の学習への取組に進むことができる。

生涯学習を考える上で、学習面の提供ももちろんだが、健康であることをサポートする面も必要である。説明を聞きながら、これらに参加するのは健康な人だなと感じた。オンライン開催など、学びたいけど家から出られない人へ学ぶ機会をサポートする体制があればよい。

年齢を重ねて物事を判断する力が鈍ってくると、さらに学びの場から遠ざかってしまうので、学ぶことが好きという気持ちを持ち続けてもらうためにも、考える力を持ちながら健康に年を重ねていき、自分自身の生活を充実したものにしていただけるような生涯学習を考えてもらいたい。健康で過ごすことと学ぶことが両輪で回るようにサポートする仕組みをこれから考えていただきたい。

＜健康長寿部＞　学ぶには健康が前提にあるというのは、おっしゃるとおりだと思う。健康長寿部では、４０歳頃から意識して健康を保っていただくように、将来の介護予防等を啓発するとともに、事業を進めている。食育を中心にがん検診など将来を見据えて若いときから健康意識を高めてもらうための取組をしている。先日は文教大学においてラジオ体操のイベントが開催されたが、そういう地域の活動にも健康長寿部ができるだけ関わって、健康づくりを進めている。

現役を引退された方がこれからのことを検討されるときによく聞くのが、社会貢献したい気持ちを持っていらっしゃること。そこを市としてお手伝いできないかという点から高齢者アカデミーがある。アカデミーで学び、その学びを地域

に還元していただき、社会貢献してもらう。学生さんにも高齢者の皆さんにも、お互いの交流が刺激になり、大学にとってもWin-Winの関係となる。近年は入学生が年間１０名前後で、多いときは３０名程度だったのが減少傾向にあるので、増やしていきたいところである。

＜委　員＞　高齢者アカデミーの入学者定員数は。

＜健康長寿部＞　定員は４０名。現在一学年１０数名ずつ在籍し、まだ空きがある状態。

＜市　長＞　高齢者アカデミーは文教大学と連携しており、入学式には学長も参加され、卒業証書も大学から授与される。

＜健康長寿部＞　正式な大学の単位となり、２年間の前期・後期で合計４単位が与えられる。

＜市　長＞　通常高齢者向けの取組としては、保健・医療・介護・福祉になるけれども、宇治市はそこに社会参加・生きがいを加えて、トータルで健康づくりに取り組んでいる。

＜委　員＞　人生１００年時代において学び続ける姿勢は大事。学校教育が終わった後も学び続ける人を育てるためには、どういう学校教育が必要か。学校教育における昨今のキーワードとして、「主体的・対話的で深い学び」がある。そういう学びが子どもたちに届くように、各学校では授業改善に取り組んでいる。宇治市がずっと前から進めている小中一貫教育・学びの連続性は、これに当てはまる。小中一貫教育によって小学校から中学校へステップアップする際のハードルが少し低くなり、自ら学ぼうとする力がついていく。

学校教育が終わったときに、自ら次にどんなことを勉強しようか、どんなことに興味を持ってそれを突き詰めていくか、という姿勢を持てるか持てないかは、学校教育の責任であると思う。受け身ではなく、自ら課題を見つけて取り組む姿勢を育む方向での教育が大事。日本全国で様々な取組がされているので、事例に学びながら、先生方には子どもたちに向き合ってほしい。

＜市　長＞　人生１００年時代に学び続けることを考えると、何に興味を持ち、着目し、自分の学びとしていくかは、遡ると小・中学校において、物事に疑問を持ち、深く考え、興味を持って取り組む力をつけることが土台になる。

＜委　員＞　あるコマーシャルで印象的なものがある。釣堀で２人が魚釣りをしているところ、一人はたくさん釣れるが、もう一人は釣れない。釣れない人が釣れる人に、「魚をくれるか、釣り方を教えてくれるか」と投げかけるもの。釣り方を教えてもらったら、後は自分で魚を釣ることができる。学び方を学ぶことが大事。

＜ｾﾝﾀｰ長＞　学ぶ土台づくりを学校教育で行うことは大きな命題。文科省の掲げる生きる力をつけていく土台が、まさに学ぶ力を身に着けていくこと。現在、学習指導要領が見直されているところだが、何をどのように学ぶのか、何ができるようになるのかという点で、先ほど委員のお話にもあったが、教職員が学びの本質に目を向けて教育活動に取り組むことは、本当に大事なことだと考える。

＜教育長＞　現代の予想しがたいことが起こる時代において、単に知っているだけ・やるだけではなく、困ったことがあったときに、どう生きて・どのように解決するかが問われると、昨今の学校教育の中で言われている。そういった力をつけるように学校教育を進めているが、それは非常に難しいことで、先生方もすごく努力して試行錯誤しながら取り組んでいる。そういう取組が、人生１００年時代を生きていく子どもたちにとって、よい土台作りに寄与するものだと思う。

＜市　長＞　長い生涯の中で、自らこれを学びたい・知りたいと思い続けたり、興味を持ったりしようと思うと、人と関わり、自分とは違う考え方に触れることもよい機会となる。行政が機会を作るだけではなく、ご本人や市民の皆さんの活動を通じて、自ら面白いと思って探求範囲を広めるなど、次のステップに進めてもらえたらよい。鳳凰大学のクラブ活動のように、プラスアルファの学びにつながることも含めて取り組んでいけたらとよいと、皆さんのご意見を聞いて感じた。

＜委　員＞　鳳凰大学等に参加している経験豊富な世代の方には、学びたい気持ちややりがいを感じていただきたい。一方で子どもたちには、興味をそそるような何かがあればいい。この２つをつなぐとしたら、２世代くらい飛び越えた交流ができたらいいのかなと思った。今はすごく便利な世の中で、欲しいものは安易に手に入る。でも、８０歳の方々が若い時代は、欲しいものは手に入らない、したいことはできない時代。そういう時代は、あれをやりたい、これをやりたいと、どんどん気持ちが膨らむ。今の若い方は、便利過ぎて何でもすぐに実現できるから、気持ちが膨らんでいかない。２世代くらい飛び越えた交流があれば、違った考え方に触れ合うことでお互いにメリットがあるのではないか。

料理の世界でもボタン一つでできる仕事はたくさんあり、そういう環境で料理人を続けていると、自分でできると錯覚してしまうが、その機械が無くなったときに作ることができる料理人がどんどん減ってきている。

世代を飛び越えた交流を持てたら、根本や本質も変わっていくかもしれない。

＜市　長＞　地域の方々が学校現場で活躍され、子どもと触れ合う時間や子どもたちに教えていただく機会があり、交流があって初めて知るものもある。その機会としてコミュニティ・スクールがあるが、コミュニティ・スクールはどこの学校も限られた人たちが参加していることが多いので、参加者を広げていけたらいい。

世代間交流に関しては、宇治市は恵まれた環境にあり、幼稚園が中学校のすぐ近くにあったり、小学校が保育園や高齢者のデイサービスを行う福祉施設の近くにあったりする。限られた小・中学校の話ではあるが、知る機会としては地域のなかで持つことができる。いただいたご意見も踏まえて生かしていけたらよい。

＜事務局＞　自ら学ぶ力をつけることについて、自分の世代を振り返ってみると、義務的に勉強し、仕事のために勉強し、仕事を辞めたらどうなるのかと不安に思う世代かなと思う。そういう世代として退職後のことを考えたときに、幼い頃から自ら学ぶ姿勢を持つことは大切であると感じるし、それを今教育委員会として、どのように教育施策を進めていくのか、頑張って取り組まなければならないと思う。

＜市　長＞　「人生１００年時代の学びの継続」について意見交換しながら、生涯学習・健康長寿について貴重なご意見をいただいた。両部にまたがって、横断的に教育や学びについて意見交換ができた。

＜教育長＞　私は小・中学校の学校教育について述べることが多いが、教育委員会は生涯学習も管轄している。子どもだけではなく現役世代・高齢者世代を含めて、それぞれの方々の学びのきっかけづくりとなるよう、何ができるのか考えながら進めていきたい。

＜市　長＞　学びの場は教育現場だけではなく、市長部局と連携しながら取り組んでいくことが必要かなと思う。今回いただいたご意見をしっかり生かしながら、地域の方々や市民の方々に学んでいく楽しさを感じていただけるような取組をしていきたい。本日は、貴重なご意見をいただき、どうもありがとうございました。

５　閉会